HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	表紙の蒙古包の写真に就いて
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 73
Issue Date	1933-11-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77683
Type	column
File Information	A018_02_03all_Part19.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

表紙の蒙古包の寫眞に就いて

本誌表紙の寫眞は蒙古包と云つて蒙古人の家屋である。蒙古人の家屋には六樣の形式があると云はれて居る。喇嘛廟、王爺府、土屋、穴居、帳幕及び此蒙古包である。蒙古人の中で今尙ほ水草を逐ふて遊牧して居る種族のみが帳幕及び蒙古包に棲んで居る。然し蒙古包の中にも移轉式のものと固定式のものがある。前者をウリガ後者をブリガと呼ぶさうである。規模の大小の別はあるが、兩者の構造は略ぼ同一である。滿鐵編「支那住宅志」には蒙古包の構造に就いて次の樣に述べてある。

「皆な圓形、通常の度、約十尺と十五尺との間に在り、周圍に十餘本の柱を立て、木棍を用ひて縱橫に之を組織す、柱頂上には木を架して梁を爲り、傘形の蓋を成す、全部に毛氈を包圍すること數層、馬尾繩を以て之を束ね、頂上の毡子は繫ぐに繩を以てす、自由に啓閉するを得、中に煙筒を設け、南面に門を置く、約三尺五寸、寬さ二尺餘、毡簾を垂れて以て風雨を蔽ふ、男女左右の居を分つ、間に佛龕、法器を設く、龕前には家長住す、云々」

ウリガは冬の雪の期節には日當りの良い山の麓の傾斜地に建てられてある。包の周圍には包を運搬する爲の車が數臺墻壁に供されてある。雪が解けはじめると包を解いて車に積んで水草を求めて移り住むのである。そして雪が來る時まで轉々と流浪の旅を續ける。

私等の祖先も曾ては水草を逐ふて遊牧の生活をして居たと云はれて居る。農耕を知つてから一定の土地に定着し鄕土と云ふものが出來た。それがづつと今日まで續いて私等はまだ其鄕土を知つて居る。

人が人と成るのは直接には主として個々の鄕土の愛と拘束によつてである。旅の恥はかき捨て得るも鄕土では恥はかけないのである。理念型の鄕土では權利は人が與へてくれ義務は自ら進んでする。

然しながら私等の子孫達は段々と又鄕土を見失ひつゝある樣である。職を逐ふて轉々と移り住む文化人の生活は謂はば古への遊牧の生活への復歸である。

大都市の郊外に夥しく增加して行く安普請の借屋住宅。其と蒙古包と一抹の相通ずるものがあるではないか。だがそこにどんな人と道義が成長して行くだらうか。（芒亭）

研究

硫酸第一水銀の化學

岐阜藥學專門學校　松原弘道

電氣化學に於て標準電池の作製、化學熱力學研究に於けて遊離エネルギー、含熱量及び活度係數等の測定の場合電池の一構成分としては其他化學工業上接觸劑等に缺くべからざる硫酸第一水銀に關する邦文の記載は比較的少きを以て此處に硫酸第一水銀の化學として其の生分物理化學的性質竝に最近の研究事績に就て述べる事とする。

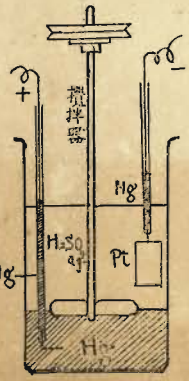
製法

一、一分の水銀と二分の一乃至一分の濃硫酸とを水銀の半分以上が固體鹽に變する迄加熱する時に硫酸第一水銀を得る。

二、硫酸（硫酸曹達）中に硝酸第一水銀を滴下す。

三、十八分の硫酸第二水銀を十一分の水銀及び六分の水と共に研磨す。此の水銀にて硫酸第二水銀を還元せしめて第一水銀鹽を得る方法は又次の如くしても行はる即ちW.C.Vosburgは五立の二モル硫酸に二一七瓦の酸化第二水銀を造り後此の溶液を濾過し之に四〇七瓦の水銀を加へ之を一夜攪拌し細粉狀灰色の硫酸第一水銀を得たり。

四、G.A.Hulettは水銀を陽極として硫酸を電氣分解して極めて純粹なる硫酸第一水銀の結晶を得たり。此の電解法によつて研究室にて純粹なる硫酸第一水銀を得るには左圖の如く內容一立の着色（茶）試藥瓶の上部を切取り之を電解槽として其の底部に水銀を入れ之に適量の一規定硫酸を注ぎ攪拌器を裝置し之を着色硝子板にて蓋をなし水銀を陽極として蓄電池一、二個に連結し攪拌する時は美麗なる純白粉狀結晶を得る。



五、R.B.Elliottは1.6の稀硫酸に硫